

五	音や空間との関係——創作の第一歩	160
六	踊る	162

第四章 デカルトと舞踏

知とは「考える」こと	168
デカルトと禅	170
フランス国立科学研究所と『舞踏 (Butô(s))』	174
フランス人の『病める舞姫』	176

第五章 「踊る身体」論

カルテジアン	180
現象学—身体への注目	181
間身体性	184
二重の身体と踊りの神	187
身体性・両義性と西田哲学	191
「踊る身体」論のために	196
即ということ	199

第六章 地球に踊る

- 日本と魑魅魍魎 202
- ヨーロッパのワークショップ 203
- ケルト人と地球の経絡 205
- ソフィーの手紙 207
- チエコの森 208
- ユングの集合的無意識 212
- 玉三郎の「自分がいなくなる」 215
- をどるたましひ (L'âme dansante) 220
- 二〇〇〇年以降 222
- 舞踏でつながる 227
- 管をつけたフレッド・アステア 229
- 地球に踊る 231
- おわりに 234

はじめに

「ああ、花を食べる人たちって、本当にいるんだ」

二〇一七年夏、南仏のセヴェンヌ山地。一〇〇〇メートルほどの峠ですが、前は平野が広がってアルプスのモンブランまで見えます。人家はここジュレミーの家だけ。道は岩がゴロゴロしてジープで迎えに来てもらうしかない。でも、ここに一〇数名の人がやってきて舞踏をしようというのです。そして、その夕食で出たのが、花のちりばめられたサラダだった、というわけです。こんな地球の裏表の遠い距離、そして舞踏の始まりから長い時間が過ぎたことを感じます。

舞踏の始まりは、六〇年安保に向かう政治的闘志と社会的興奮に充ちた時代のなかでした。世界的にも、行き過ぎた物質社会、現代文明に批判ののろしを上げてヒッピーの運動が沸き起り、演劇や舞踊界にもその波紋は広がった熱い時代。と言ってもその当時のことは、まだ子どもだった私には知る由もないのですが、東京に出てきて芝居や踊りに関わり始めた七〇年代にもその熱の余波は十分ありました。と言うより、いま思うと、実験的な色合いから始まった舞踏がいわば爛熟期（あまり舞踏にはふさわしくない言葉ですが）に入り、演出・振付から各ダンサーの技量まで、ある完成形のようなものに至っていた感じがします。そんなよき時代であったのに、私は、高度成長期の日本から逃れるように、そして私自身の私的な理由からフランス在住の身となり、それが予想外の長居になりました

た。

それから日本にはいろんなことが起こったらしいのです。まずは経済。膨らみに膨らんだバブルがはじけました。七〇年代にはまだ感じられた闘志は収束し、体制に取り込まれ、そこにシラケた虚無感を残し、さらにその後、若い世代は引きこもりやイジメという現象に苦しんだと聞きました。ちなみに引きこもりやいじめはフランス語には訳されずに、そのまま“hikikomori” “jime”と書かれて、ジャポンの驚くべき現象として雑誌で紹介されていました。

二〇〇〇年代初め、私は二十数年ぶりに日本に帰ったウラシマでした。空港で「国鉄」を探し、ずいぶんたつて目の前のJRがそれに代わったと理解。ジャングルで発見された元日本兵や、北朝鮮の拉致被害者帰国のニュースなどを見て、同じだと感じたものです。当然のこととして舞踏も、私が出て行ったところは変わっていました。そのことになによりウラシマは愕然としたものです。世界の中に据えられつつあった舞踏と本家本元の日本の舞踏の違い……。

私がこの本を書こうという気になったのは、まず、ヨーロッパでの四〇年の舞踏体験を日本の読者に知ってもらいたいからです。とにかく舞踏はフランスでは大人気の大入り満員。さらにこの哲学好きな文化国家は、舞踏をマジメな研究対象とし、国立科学研究所が『舞踏 (BUTÔS)』という大部の一般向け研究書を出して、再版にまでなるという勢いです。私自身、アルベール・カミュと近しかった女優さんと国立劇場で、またフランソワ・トリュフォーの映画にも出演した有名俳優とバタクラ

ン劇場で、と数々の大きな舞台で踊ったり演じたりする経験をしました。一方では経済破たん厳しいギリシヤのクレタ島の片田舎にも、三〇年続いている舞踏ワークショッブグループができ、南仏セヴエンヌでは、がん末期の生徒が三年目の参加を遂げ、最後の命の光のような踊りを踊ってくれました。地球のさまざまな場所でも多くの人たちと分かち合えた舞踏という「たましひの踊り」の広さ・深さを、私自身まだまだ驚きの目で発見し続けています。

私は数学者の娘として生まれ、東京大学で学びながら舞踏へと向かったのですが、そのいきさつは、「理性の国」フランスが「非理性のカラダ」の舞踏を求める姿とタブって見えることがあります。なりゆき任せの人生でしたが、一度すべてを捨てて、異邦人としてアノニマス（匿名）になるなかで、少しだけ「闇（≡光）」の世界を歩み始められたことを感謝しています。

舞踏には時に「オドロオドロしい、わからない」などの声が聞かれます。けれども、あらためてその出发点を覗くとき、そこには「真の闇の中は光でいっぱい」という言葉があります。合理社会が突き進んだ結果、何か私たちが忘れてしまったものがあるのではないか？ そう考えます。理性で分けられる以前の混沌がはらむ原石の輝き、その「闇（非理性）の光」の世界に一步でも深く分け入ることを願いつつ。

二〇一八年二月

パリに住む

舞踏についての知識も技量も、いまから思えば未消化でがむしゃらに丸呑みしただけのような状態であったが、私は三浦一壮のグループ「舞踏舎」の振付アシスタントとして、一九七七年、フランスのナンシー国際演劇祭に参加した。後に大野一雄、山海塾などがそこから上陸を遂げた、いわばヨーロッパ進出の登龍門だが、舞踏舎はなぜかそれほどブレイクしないままグループは帰国し、私は単身ヨーロッパに残り、パリを中心とした舞踏活動を開始することになる。

イタリアのシシリ島から始まったグループのヨーロッパ公演ツアーは、ナンシー演劇祭をきっかけにグロトフスキーからイタリアのワークシヨップに招待を受け、また当時のユーゴスラビアから公演のお声がかかったりで、結局五カ月あまりのツアーになった。ヨーロッパのいいところは、一つ仕事をすると次々とつながるといふところだ。ことに東洋に対する探究心にはなみなみならぬものが感じられた。ツアーの数カ月が過ぎて、私はしばらく滞在を延ばして、ヨーロッパ演劇・舞踊界をもう少し見たいと思い始めた。そして、なぜ私たち日本のグループがそれほどまでに注目されるのか、そのわけももっと知りたいと思った。

ヨーロッパには何があるのだろうか、そして日本には？ 日本人でありながらはつきりつかめない日本。個人的にも色々な足枷に絡められた日本を離れて、私の学歴も家族のこともだれも知る人のない

ところで、ただ一人の人間として「ゼロ」から始めたい、というような気もあった。ちょっとした「出家」^{しゅっけ}のような覚悟であった。

一八の春、流されるままに東大に入ったものの、私はいったい本当は何をしたいのか、という問いを突きつけられ、悩んだ挙句、お芝居や舞踏の道に分け入ったのが二〇歳のころ。そして早稲田小劇場やVAVスタジオなどで訓練を受けていたのが、たまたま参加していたグループがフランス随一の国際フェスティバルに招聘されることになった。そこで触れたものは私に、「もうちょっと先に進んでみる」と言っているようだった。それより所得倍増だ、列島改造だ、と異常なまでの「高度成長路線」を薦進する日本と比べて、なんとヨーロッパはゆったりしていることだろう。ああ、しばらくここにいてみたい……。こうしてはじめるは数カ月のつもりでの滞在を企図した。それがなんと数十年にもなるとは！

暗中模索に始めた私のパリでの戦い、私の仕事を、フランスは大きなフトコロで受け入れてくれた。ことに八〇年代、九〇年代は、日本のバブルもオイルショックともまったく無縁に、夢までフランス語で見ていた。地球の裏側で、日本から見たらまったくの「宇宙人」のように生きていた。ジャン・ルイ・パローやアルベル・カミュの親友であったという女優さんとも共演し、フランス随一の演劇の殿堂コメディ・フランセーズでも仕事をしていった。

フランス人との結婚、息子の誕生、子どもと一緒に過ごしたモンスリー公園、セーヌ川と石畳の街、

いつフラッと行ってもいつも何かやっているカルチェラタンの映画館街。そして共演したすばらしい役者、ダンサーたち、わがままな演出家たち……。フランスは私のもう一つのふるさとだ。シャルル・ド・ゴール空港に着いて、タクシーの運ちゃんとおしゃべりを始めた途端、あのクシャクシャと詰まったような発音のフランス語、気難しげなふりをしているけど、その実は本当に陽気で人恋しいラテン民族。あのフランス人たちと過ごした、あの生活が戻ってくる。

グロトフスキーとの出会い

私が参加した、一九七七年のナンシー国際演劇祭参加者の顔ぶれを見れば、それからの私が辿る方向性を感じてもらえるだろう。ジェルゼイ・グロトフスキー、ピーター・ブルック、タデウシユ・カントール、ピナ・バウシユ、カロリン・カールソンなど、いずれも当時の演劇界、ダンス界を率いる大物たちであり、彼らの提示した作品や方向性は、いまに至るまで、ヨーロッパのみならず世界の演劇・舞踊界に多大な影響を与え続けている。

たとえばグロトフスキーは、東洋的な身体技法を取り入れて肉体改造、つまり自律神経や情動を統御できる特別な心身の回路作りを唱え、有名な「グロトフスキー・メソッド」を生み出しつつあった。またタデウシユ・カントールの『死の教室』も、一九七七年、ナンシーの話題作であった。「役者と等身大の人形、人形化された役者の動き」の両者が交錯するカントールの思想と手法には舞踏との共

古関すま子（こせき・すまこ）

1949年、京都生まれ。東京大学文学部卒業。在学中より、鈴木忠志（早稲田小劇場）に師事。ついで三浦一壮に舞踏、坪井香譲に新体道を師事。1977年に三浦率いる「舞踏舎」のメンバーとしてナンシー国際演劇祭に参加。グロトフスキーらと交流し、その後フランスに在住してバタ克蘭劇場、ロン・ボワン劇場、コメディ・フランセーズなどで舞踏活動が続ける。さらに、日本で駒澤大学、放送大学などで教鞭をとりつつ欧日を行き来し、アヴィニヨン演劇祭やフランス、チェコ、ギリシャなどに招聘され、公演やワークショップを行っている。現在、岡山市在住。

フランス舞踏日記 1977～2017

2018年4月15日 初版第1刷印刷

2018年4月25日 初版第1刷発行

著 者 古関すまこ

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル 2F

TEL: 03-3264-5254 FAX: 03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266

装幀／奥定泰之

印刷・製本／中央精版印刷

組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1689-0 © Sumako Koseki, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。